

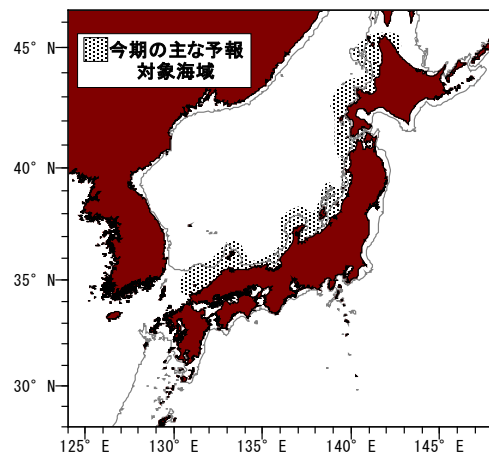


2022年度 第1回 日本海スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2022年5月～7月)のポイント

- ・ 来遊量は前年を上回り、近年平均並
- ・ 主な漁場は本州北部日本海以北で漁期は近年同様



* 近年は最近5年間(2017年～2021年)、本州北部日本海以北は石川県以北を示す

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構
担当：企画調整部門（横浜） 上原
浮魚資源部（横浜、新潟） 大島、宮原
電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001
当資料のホームページ掲載先URL
<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

2022年度 第1回 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2022年5月～7月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海沿岸域

対象漁業：主にいか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群

(1) 来遊量：前年を上回り、近年平均並

(2) 漁期・漁場：主な漁場は本州北部日本海以北で漁期は近年同様

* 近年は最近5年間(2017年～2021年)

I 漁況予報

日本海におけるスルメイカの資源調査結果（2021年10月～11月のスルメイカ稚仔調査I、および2022年4月のスルメイカ新規加入量調査）と2022年度第1回日本海海況予報を主要な情報として、今期（2022年5月～7月）の日本海沿岸域におけるスルメイカの漁況を下記のとおり予測した。併せて2021年12月のスルメイカ稚仔調査IIの結果と、2022年4月のスルメイカ漁期前分布調査で得られたスルメイカの分布状況も示した。

【予測】

今期（2022年5月～7月）の日本海沿岸域へのスルメイカ来遊量は、前年を上回り、近年平均並と予測される。また、近年の海洋環境および調査結果から主な漁場は本州北部日本海以北で漁期は近年同様と予測される。

【情報】

- (1) 2022年4月に実施したスルメイカ新規加入量調査の結果では、今期漁獲対象になると予測される外套背長5cm以上のスルメイカの1調査点あたりの採集尾数は10.0尾で、前年（3.4尾）および近年平均（6.4尾）を上回った。
- (2) 2021年10月～11月に実施したスルメイカ稚仔調査Iでは、親魚量の指標となる幼生の分布密度は、2020年を下回り、過去5年（2016年～2020年）平均を上回った。また、2021年調査で採集された幼生のうち、外套背長1mm未満のおおよそ孵化直後と考えられる個体の分布密度は2020年と同数であった。
- (3) 2022年度第1回日本海海況予報では、スルメイカの漁場形成に影響を与える4月中旬～6月の対馬暖流域の表面水温は平年よりも「やや高め」、50m深水温は「平年並み」と予測されており、2019年以降、同様の傾向が続いている。
- (4) 2021年8月～12月の小型いか釣り等によるスルメイカ（生鮮）の漁獲量は、西部日本海で2020年および過去5年平均を上回り、特に産卵期の10月に漁獲が多かった。また2022年1月～3月の漁獲量は、本州北部日本海および西部日本海で前年および近年平均を下回った。
- (5) 2021年のスルメイカ稚仔調査Iの結果（特に外套背長1mm未満の孵化直後の幼生個体数）および同年10月の西部日本海の漁獲状況から、産卵場に来遊した親魚が多かったことが示唆された。また、2022年4月のスルメイカ新規加入量調査において外套背長5cm以上のスルメイカが前年および近年平均よりも多かったことから、今期（2022年5月～7月）の日本海沿岸域への来遊量は低調であった前年を上回ると考えられる。一方、2019年以降、沿岸域への来遊は不安定であることも多く、2022年の漁期前分布調査でも北上する群を確認できていないことから、近年平均を上回るほどの結果を得られておらず近年平均並と考えられる。

II 説明

1. 調査結果

1) 4月におけるスルメイカの分布状況

<目的>

いか釣り漁業では外套背長15cm以上のスルメイカが主な漁獲対象となる。したがって、いか釣り漁業で漁獲される前のスルメイカ（主に外套背長2cm～10cm）の分布状況を把握することで、その後の漁況を予測することが可能となる。そこで、日本海では主漁期前の4月に漁獲加入前のスルメイカの分布状況を把握するために新規加入量調査^{*1)}を実施している。なお、本調査で採集されたスルメイカのうち、外套背長5cm以上のサイズが本予報期間（5月～7月）の漁獲対象になると想定される。

加えて本予報期間（5月～7月）の前半に漁獲対象となるスルメイカの日本海での分布状況を把握するため、2019年より4月にスルメイカ漁期前分布調査^{*2)}を実施し、スルメイカの分布状況を整理した。

*1) スルメイカ新規加入量調査：網口幅10m～12mの表層トロール網を用いた採集調査。各調査定点で3ノットの速度で30分間曳網して実施。

*2) スルメイカ漁期前分布調査：自動いか釣り機による釣獲試験。各調査定点で夜間に原則8時間の釣獲を実施。

<結果>

2022年の新規加入量調査では、表層トロール網を用いた採集調査を39点で実施した（図1）。外套背長5cm以上のスルメイカは調査海域全域に広く分布しており、北緯38度50分、東経134度30分の点で最も多く採集され（78尾）、次いで北緯39度50分、東経138度30分の点で多く採集された（50尾）。

1調査点あたりの平均採集尾数は13.3尾で、前年（18.5尾）の72%、近年平均（20.4尾）の64%であった。一方で、本予報期間（5月～7月）の漁獲対象になると想定される外套背長5cm以上の平均採集尾数は10.0尾であり、前年（3.4尾）の297%、近年平均（6.4尾）の156%であった（図2）。

また2022年の漁期前分布調査では、いか釣り調査を5点で実施した（図3）。前年の秋生まれと推測される外套背長16cm～17cm台の小型個体の割合が比較的多かったが、本年は例年と比べ調査点数が少なく当該海域の十分な情報を得られなかった。分布密度の指標となるCPUE（釣り機1台1時間あたりの採集尾数）の平均値は2.9尾で、前年（3.7尾）を下回った。CPUEは佐渡南の点で最大10.1尾であった。またスルメイカが採集されなかった点もあった。

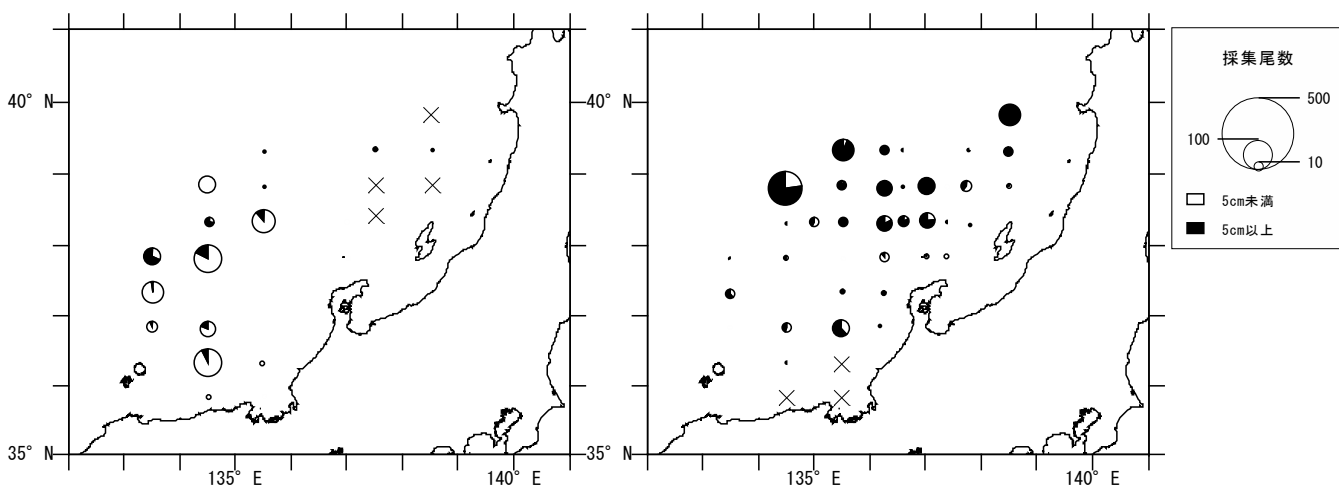


図1 2021年および2022年4月のスルメイカ新規加入量調査結果

○の面積は採集尾数、×は採集されなかった調査点をそれぞれ示す。

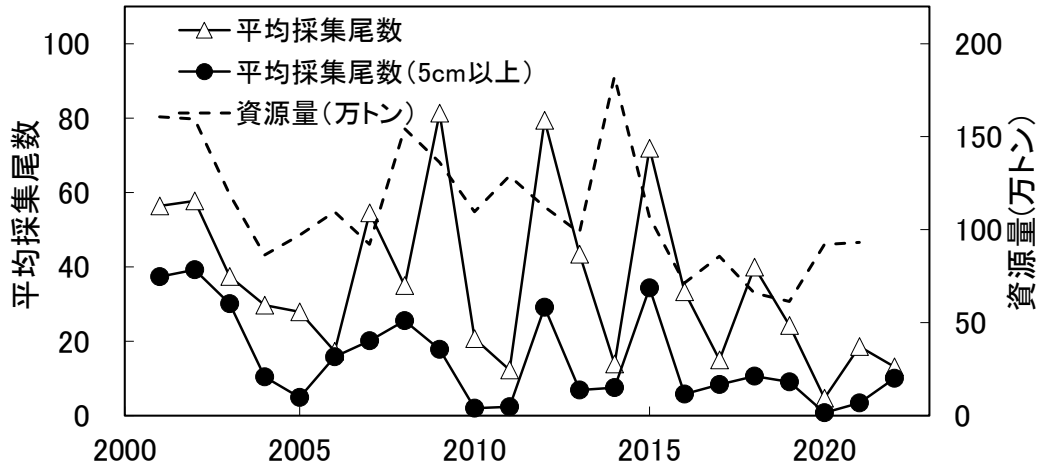


図2 新規加入量調査による平均採集尾数（全数および外套背長5cm以上）と推定資源量の経年変化
推定資源量は令和3年度スルメイカ秋季発生系群の資源評価に基づく。

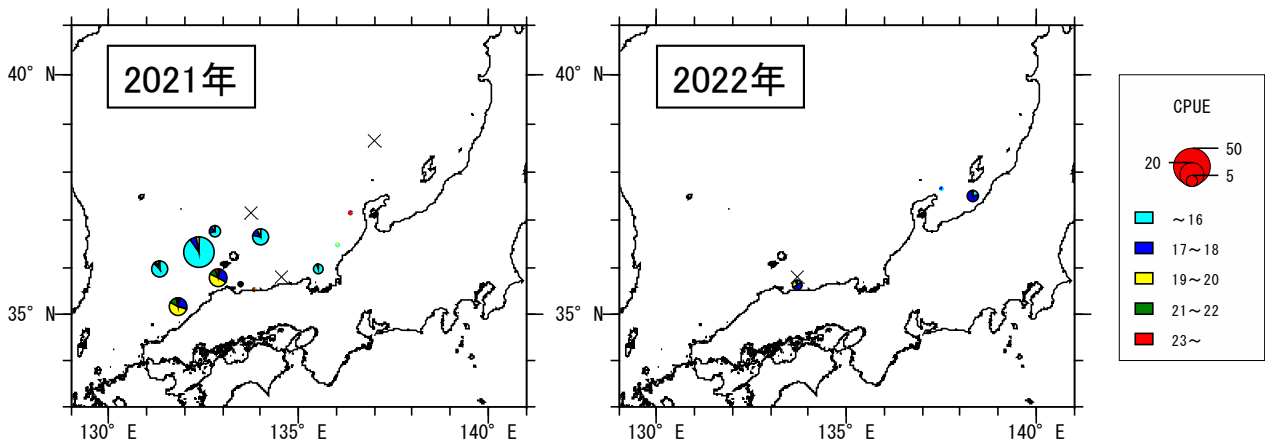


図3 2021年および2022年4月のスルメイカ漁期前分布調査結果

●の面積はCPUE（釣り機1台1時間あたりの採集尾数）、各色は各外套背長範囲（cm台）の比率、×は採集されなかった調査点をそれぞれ示す。

2) 2021年秋のスルメイカ幼生の分布量

<目的>

5月～10月の日本海では、主に前年の秋～冬に生まれたスルメイカ秋季発生系群が漁獲される。したがって、秋～冬のスルメイカ幼生の分布量は、その年のスルメイカ秋季発生系群の親魚量（とり残し量）の指標値になる。そこで、日本海では毎年10月～11月および12月にスルメイカ稚仔調査I、II^{*3)}をそれぞれ実施し、親魚量の把握を行っている。

*3) スルメイカ稚仔調査I、II：口径45cmのプランクトンネット（網目合0.33mm）を用いた採集調査。各調査点で深度150mから海面までの鉛直曳によって主に外套背長1mm～3mmのスルメイカ幼生を採集する。

<結果>

2021年10月～11月の調査では隠岐周辺と対馬海峡から五島列島にかけての海域で幼生が採集された（図4左）。1調査点あたりの平均採集尾数は0.33尾で、2020年の調査結果（0.62尾）の53%、過去5年（2016年～2020年）平均（0.26尾）の127%であった（図5）。このとき、2021年の調査で採集された幼生のうち、外套背長1mm未満の孵化直後の個体の平均採集尾数は0.29尾であり、2020年調査結果と同数であった。また12月の調査では幼生がほとんど採集されず、1調査点あたりの平均採集尾数は0.03尾（前年0.10尾）であったことから（図4右）、10月～11月に本調査海域へ来遊した親魚が多かったことが示唆される。

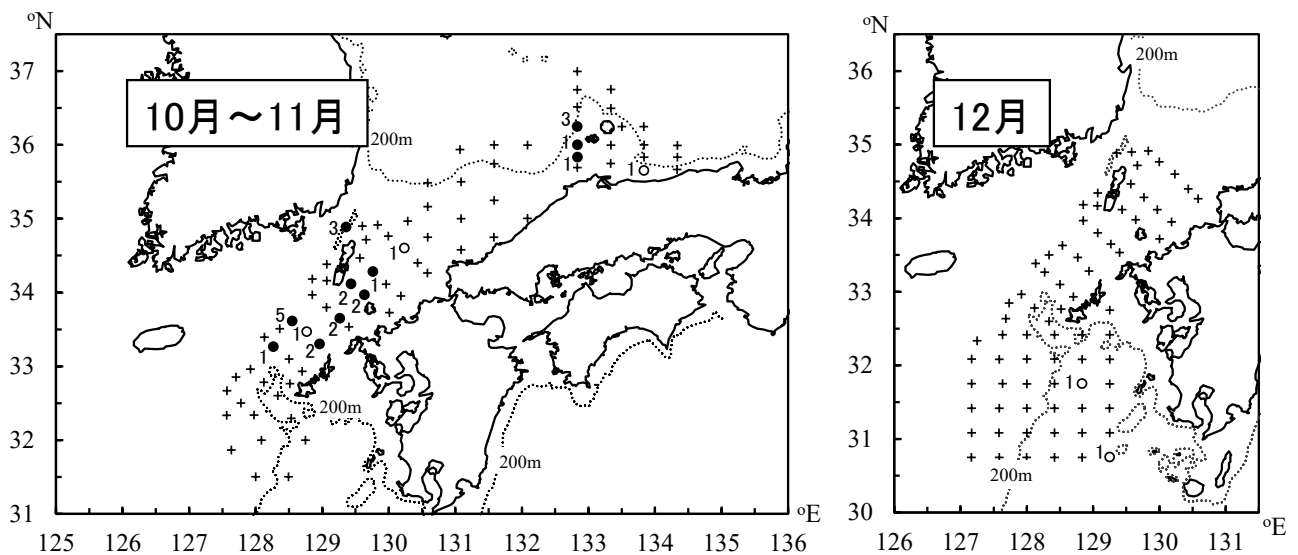


図4 2021年10月～11月（左）と12月（右）におけるスルメイカ幼生の分布調査結果

● 外套背長1mm未満の幼生が1個体以上採集された調査点、○ それ以外の幼生のみが採集された調査点、+ 幼生が採集されなかった調査点。図中の数字は各調査点における採集尾数。

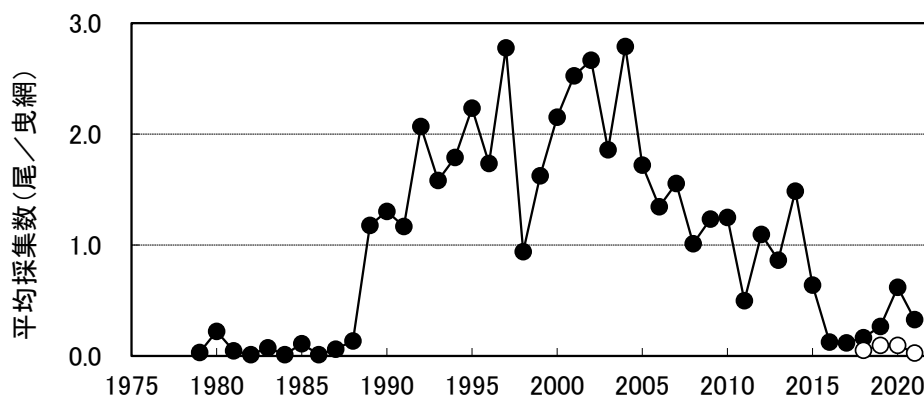


図5 スルメイカ幼生の1調査点あたりの平均採集尾数の経年変化
●は10月～11月、○は12月の平均採集尾数をそれぞれ示す。

2. 日本海における海洋環境

スルメイカの分布回遊は水温と深く関連しており、沿岸域の漁場形成は主に水温に影響を受ける。2022年度第1回日本海海況予報^{*4)}では、4月中旬～6月の対馬暖流域の表面水温は平年よりも「やや高め」、50m深水温は「平年並み」と予測されており、2019年以降の日本海沿岸では同様の傾向にある（日本海海況予報における平年は1986年～2015年の平均値）。

*4) <http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2022/20220408/index.html>

Ⅲ 日本海におけるスルメイカ漁況の経過

日本海では、1月～3月上旬は前年の冬に生まれたスルメイカ（冬季発生系群）が主に漁獲され、3月中旬～4月は前年の春～夏に生まれたスルメイカ、5月以降は前年の秋に生まれたスルメイカ（秋季発生系群）が漁獲の中心となる。このため、1月～3月の漁況は予測対象期間の漁況には直接結びつかない。

前年の予報対象期間（2021年5月～7月）では、漁獲量は日本海沿岸域全体で過去5年（2016年～2020年）平均の55%と下回った（図6）。海域別に見ると、道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海がそれぞれ過去5年平均の13%、31%、55%と下回った一方で、西部日本海では過去5年平均の151%と上回った。8月～12月計は、道道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海がそれぞれ22%、44%、45%と下回った一方で、西部日本海は過去5年平均の241%と上回り、特に10月に漁獲が多かった。

2022年1月～3月の漁獲量については、本州北部日本海では1月～3月は前年の50%、近年（2017年～2021年）平

均の53%、西部日本海では1月～3月は前年の59%、近年平均の65%であった。

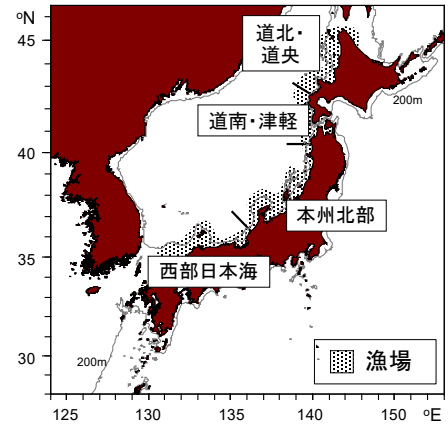
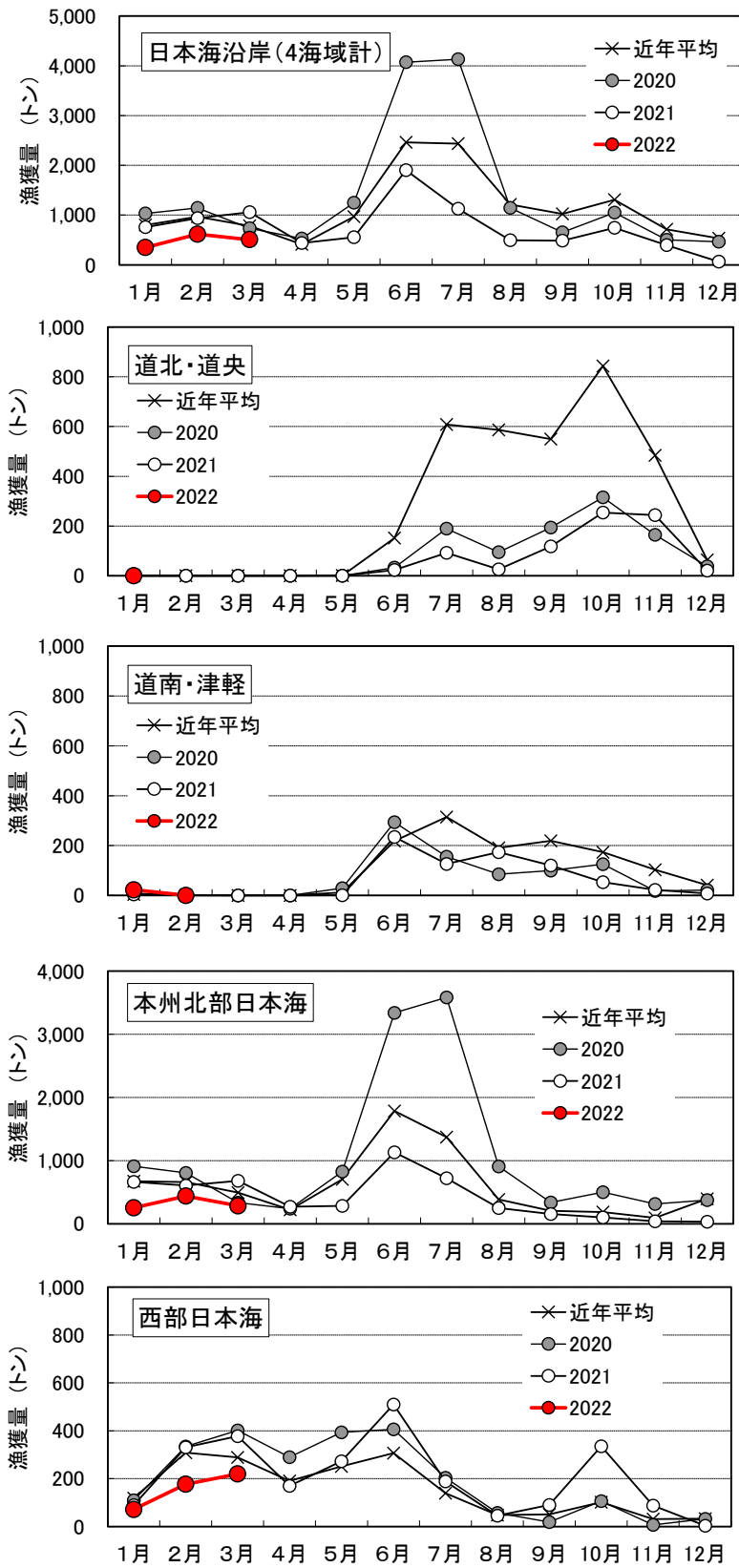


図7 本予報における漁獲量の海域区分
道北・道央は宗谷～後志、道南・津軽は渡島・檜山・青森県、本州北部日本海は秋田県～石川県、西部日本海は福井県～長崎県をそれぞれ示す。

図6 日本海沿岸（4地域計）および地域ごと（図7）の漁獲量（近年平均、2020年、2021年および2022年）の経過
ただし2022年の一部は未集計および速報値

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場 函館水産試験場 稚内水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産研究所	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター (取りまとめ機関)
福井県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所